

最 新

唱 歌 教 科 書

(伴 奏 附)

里の秋

Andante.

p

アキカゼ

サラサラ サラ カドタノ イナバヲ

フクナルロ ナルロガ ケタタマ

シク カカシモ オドロキーガホ

村の祭

Ländlerartig.

f

ハガネノホナミ
ニガハニ
ノクニ
ネマ
ガナ
ハナ
ミ

モウリニワセテウキタツムラノイッリビサトニ
ミヤノマッハナピンオトモイサヤシケン

ヒビク フエヤ ターイーコ ズメ キネ ズメク ニギハヒ
イツリ ウタハ イーハーハ コガネ ミノル ヨキヒ

卒業の友を送る

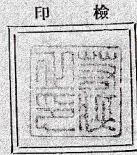
mf

トソロロニ
モヨハシ
にノ
カノキ
ゼのキ
モナニ
タヒタ
アツア
シキシ
ノキン
キカナ
ニナハ
ニニ

ルカチ
アミタ
ハチコ
モヨロ
トシミ
イモキ
ニヨバ
コロラ
コレア
ヤヨモ
イモリ
イモチ
テシキ
ミにケ
ゲレズ
ハナシ
メロ

ハハ
イモタ
ハハ
イカオ
ハハ
イカオ
ミハニ
キリカ
ノハ
ルミヒ
サモ
カオ
キモ
シモ
ニツリ
ヤダハ
アハカ

昭和貳年三月二十日印刷
昭和貳年四月一日發行



不許
複製

編纂者 若狭萬次郎

印刷者 山中壽一

印刷所 大阪市東區北濱三丁目二〇番地ノ一
山中金龍堂

發行所 大阪市西區北堀江通一丁目
日本樂器製造株式會社

代表者 刀原四郎

定價金壹圓五十錢

○樂しげなる農夫

一、親子兄弟姉妹寄りて。
しなへる小稻を刈りぞ急げる
見よや雀も小田に群れつつ
豊けき秋を喜びをぐる

嬉し農夫樂し農夫

二、つゞく日和に笑顔を見せて
干したる小稻を扱ぎぞ急げる
聞けや百舌鳥森に群れつゝ
豊けき秋をよろこびうたふ

嬉し農夫樂し農夫

○里の秋

八波 則吉

秋風 さらさらさら

門田の 稻葉を吹く

鳴るよ 鳴子がけたたましく

案山子も 驚き顔。

○村の祭

一、黄金の穂波森によせて

淨き立つ村の祭日

里にひびく笛や太鼓

ぞめきぞめく賑ひ。

二、とどろく太鼓浦曲わたり

ふきなす笛のゆかしや

けふの祭うたへ祝へ

こがねみのるよき日を

三、野山にごよむ宮の相撲

花火の音もいさまし

けふの祭うたへ祝へ

こがねみのるよき日を。

○秋の古城

山崎 紫泉

一、松の梢を 訪ふ風に

昔を偲ふ荒城の

草むらがくれ 蟲すだく

チンチロリリチンチロリ。

二、露と消ねにし壯夫の

み靈に捧げし百千草

優しき貞操の花蔭に

チンチロリリチンチロリ

○深山の紅葉

犬童 球溪

一、時雨に露に霧に風に

立田の姫は染めて織りし

錦が綾か山のもみち

旭に清く色を映ゆる。

二、誰れにか着すと、夜ごとく

立田の姫は染めて織りし

濃染の衣の山のもみち

夕日赤く色を映ゆる。

旭に夕日に懸けて酒す

深山のもみち見れど飽かず。

○秋のかなしみ

一、野山は 時雨で ましか 悲しく

秋野の 白露 あはれ まされり

二、さびしき さびしき 小夜の 雁が音

思ひは 消ぬべく 吾は 思はゆ。

○獵夫の歌

犬童 洪溪

一、分け行く山路、攀づる岩根

猿のごとき足の運び

ララ……………

高き梢に鳥は歌ふ

二、梢の鳥よ安く歌へ

望むは谷に住める獸類

ララ……………

勇める犬の叫び聞ゆ。

三、勇める犬よ高く叫べ

手に執る銃の先きもふるふ

ララ……………

出づるは何か来るは何か

○冬のおした

一、しとねを離れて雨戸を繰れば

おく霜真白に雪かき見せて

心も清爽しや冬の朝は

汚れし小庭も藁屋の屋根も

見るから清けく化粧なして。

二、小庭におりたちあたりを行けば

氷の水船鏡と見せて

心も清爽しや冬の朝は

亘せる寛に破れし軒に

真玉の簾をよそほひ懸けて

○友を送る

八波 則吉

一、行くか 友よ 汝ひとり

我等を置きて 遙けき旅へ

行くか 友よ 汝ひとり

友よ いざさらば

汝が行く先に 幸こそ待てれ

行けや 友よ いざさらば

○歳暮

一、あはれこしも夢さくらし

をしむ日数さ早やもなりぬ。

二、過ぎしひと年かへり見れば

成しし事ごとあともなくて。

三、朽ちし軒ばに風すさび

老ひの頭に雪ぞつもる。

○卒業の友を送る

一、雪のおしたも風の夜も

つごめはげみて今やこゝに

いとも光榮ある綾錦

かざる其の君祝へ祝へ。

二、長き月日を此の庭に

睦びなれにし友よく

よしや千里を隔つとも

心ばかりは變らざらん。

三、花の朝に月の夜に

心しづげき折もあらば

君よ此方をかへり見て

思ひ遙かに運び給まへ。